

牧野

T1A1
22
(K113)

修身說約卷の二

木戸麟編集

第一

萬吉ハ伊勢の國鈴鹿峠の人ふゝて父
を市右衛門といひ母を久米といふ市
右衛門家まづけきば佐ねよ人々傭
役せり一日旅客の行李を擔ひ途中ふ
て卒に倒れ死せり市右衛門二兒あり

長子ハ即萬吉トテ、時ハ四歳ナリ、次子
を吉次トイフ、こもまゝ、幾バクナラ
ズ、死セシ、父米カク、節操をま
りて寡居シ、紡績絳織を業トシテ、萬吉
を鞠養セシ、さきと夫を喪ヒ、兒を亡
シ、憂鬱シテ病ヒを成シ、時々發作
セシ、萬吉それカサシ、肩
を摩テ、腹を按シ、晝夜心休ムク、テ看

護シ、病ハ間あきバ、街道ヨリ、旅人
の包カシ、又手槍カトを負擔シ、鈴
鹿峠を昇降シ、わたり、銭を得、母の
欲スルものを買ヒ、或は藥餌を沽ヒ、求
む、人みな之ヲ感トテ、恤マズルものナ
リ、是ナリ、このとき、萬吉六歳ナリ、
比年饑饉打ツ、途ニ餓死スル者
多シ、萬吉母子ハ凍餒セズ、

とぞ、天明三年癸卯仲秋、幕府の臣石川
忠房といふ人、大坂城を發して東へ歸
るけるが、水口驛より轎をくだり、僚友
と土山驛を過て、鈴鹿嶺よりかゝるやう
に、六七歳の兒童、垢衣を洗ひ、敝履をう
かち、燃紙條より數錢を貰きて、攜へ、忠房
等を見て、路傍より避けしう、錢一人これ
より戲きて曰く、汝錫を買ふんと欲する

ゝ何ぞ持の錢乃おほきや、兒莞爾とし
ていふ、こゝにい阿嬢よりねくらんとす
る者ありといふ、それ錢をよめ、よめて
得しやとやふ、客の手槍をにふひて
坂を下りしより、得たりと答ふ、忠
房等、此を奇とし、萬吉を使ひて、猪鼻
の茶店より憩ひしに、一人あり、萬吉を指
さして、これを孝子よて萬吉といふも

乃ち名をといへばその傍に憩ふ轎夫馬
 丁もえ、それ孝行を稱へり忠房
 ふうく底歎いて、志うらむその家を訪
 るんとて、鈴鹿嶺を踰えて山陰を下る
 に茅廬六七戸あり、一婦人萬吉を叱り
 て、汝をんを貴人ふさねば此や宜く跟
 従まべしといふ衆あやみてこれを
 問へば、忠房もち久米を忠房に萬吉

の宅小
 こふ家
 た、四壁
 能こふ
 赤貧洗ふ
 がど
 久米年三
 十四五



冷泉為春
 此の
 物語
 久米
 年三
 十四五

参身宛内

かゝりて顔色おやぬへ衣あはれき青
き芋乃莖を割きてあまーが忠房等を
拜して敝廬小枉顧せらるゝ計かき
事なきよゝを述べり忠房曰いく途
中ふて萬吉の孝行を聞き欽羨不堪へ
む汝かく乃ごや死孝子ありほふらん
を貧窮を憂へんや久米年來の不幸薄
命を説き且曰いく今夕い十五夜よて

隣里の兒輩を各新き衣服をはき嬉戲
をれどし萬吉も新衣もななくほゝ飢渴
ふせしむを隨意に遊ぶことあふべ
妻今朝いへらく汝隣兒とあそむん
口腹い何つべきいのなき哉いふふせ
んと兒妾の意を測りてまことも沮色
なく垢衣索帶ふて出て行なり妻志い
一目送りておほえげ泣き伏せし忠

房曰いく萬吉の至孝、汝の貞操、天地神
明の照覽したふところなり。汝貧窮
よやをんとして他日の幸福をまつべ
と、懷中より銀子若干を以てし、萬吉よ
阿ふへて曰いく、こそい些少なりとい
へども感慕の意を表するものなり。汝
益孝行をつとせよと萬吉の銀子を
先人の神位に奠し、掌をあひせて、替増

をることや、ひさし衆より感歎を
うたへ房はさにからむとて、欠米をかへ
りてて曰いく、人とか飢寒よせずば
不良のこと、後世生ずるものなり。故に
小人窮をきか、こゝに濫るといへり。た
とひ飢餓よせほるやと平生の貞節を
變じて持の良心をうゝあふことな
し。我幸よしと汝母子のごとき至孝貞

節の人よ阿ふこや我得たり、今よりこ
乃地をまゐるぶとに、かゝらば訪ふべ
し、急よ乏きこやあらは、郷報をべ
し、今茲十月まゝ訪ふべし、其の歳十
月、忠房此の地をまゐり、江戸より齋
來り、藥餌などをあへて、これと
里浪華へ更番をうごに、かゝらば萬
吉母子を存問せり、嘗て日久米從容や

し、忠房よ曰ひける、妻大に君の恩
顧を被りて、消埃乃報をねがふ
ハ萬吉を以君の奴隸と、妻ハ紡績
て生活を計らん、忠房曰く、我もま
久く萬吉を得んと欲せり、やえ、天の孝
子を生むるを、偶然とあらば、世の不育
のものを諭さんとか、今こそを攜へ
さらば、おそらとハ天の意に托むらん

や、忠房同僚諸友の此此地を過るゑの
ふを、必二人を存問せしめ、事ある人々
傳聞して、此の地を過るゑ、萬吉を訪
ふさるゑ、能くあきにいたさるゑ、或人萬吉
の家乃志を、がきこゑとて、やたらんと
て、其の門小表して、孝子萬吉の家と書
せしと、我、忠房の友人、三橋成烈と、い
ふ人、浪華ふおとむきりるゑ、萬吉の

こと、我、あつゑ、冷泉爲泰卿より呈し、
き、が、爲泰卿和歌一首をたは、も、事、
成烈、こと、を、扁額として、我、家、か、
が、め、た、爲泰卿の子、左衛門督爲章
卿、乙巳四月例幣使として、日光山にお
ゑ、む、られ、歸路萬吉を訪ひ、錢若干をた
まへ、し、や、が、萬吉、孝名天下小、
い、るゑ、か、事、事、丁未三月道中奉行

桑原伊豫守、幕命を授け、萬吉を江戸に召し、白銀貳拾錠を賜ひ、久米ふり終身一口をたほへし。時、萬吉十二歳あり、是より先づた江戸よりまたるゝの、忠房乃妻重病よか、醫藥の志るゝあきとゝを傳へ、萬吉母子大ふこををうきひて、日夜心を焦し、萬吉を日々鈴鹿權現ふまぬで、病ひの平愈を祈り、あるが日あらば、は病ひいえぬ人ゝか孝子至誠乃感應をうところありと稱せしといふ。

第二

司馬光字ハ君實トイヘル人ハ河内ノ人ナリ、生レテ七歳屹トレテ成人ノゴトシ、嘗他家ノ庭中ニ一ノ大甕アリ、群童之ニノボリテ戲レシガ、一童子アヤ

マチテ水
 中ニ陷レ
 リ、群童大
 ニ驚キ救
 ハントス
 レドモ術
 ナレ、時ニ
 君實一塊



石ヲモチキタリ、甕ノヤフヲントス、金
 曰ハク、之ヲヤブラ、恐ラクハ主人ノ
 譴怒ヲ蒙ラン、君實曰ハク、一甕ノシ
 人命ニカヘント、タバチニ石ヲ抛テ
 之ヲ碎キ、ツヒニソノ兒ヲ活スコトヲ
 得タリ、後、宋主哲宗ニツカヘ、官丞相ニ
 イタレリ、嘗資治通鑑ヲ著ス、卒ス、一
 オヨビテ、大師温國文正公ト贈諡セラ

レタリ、

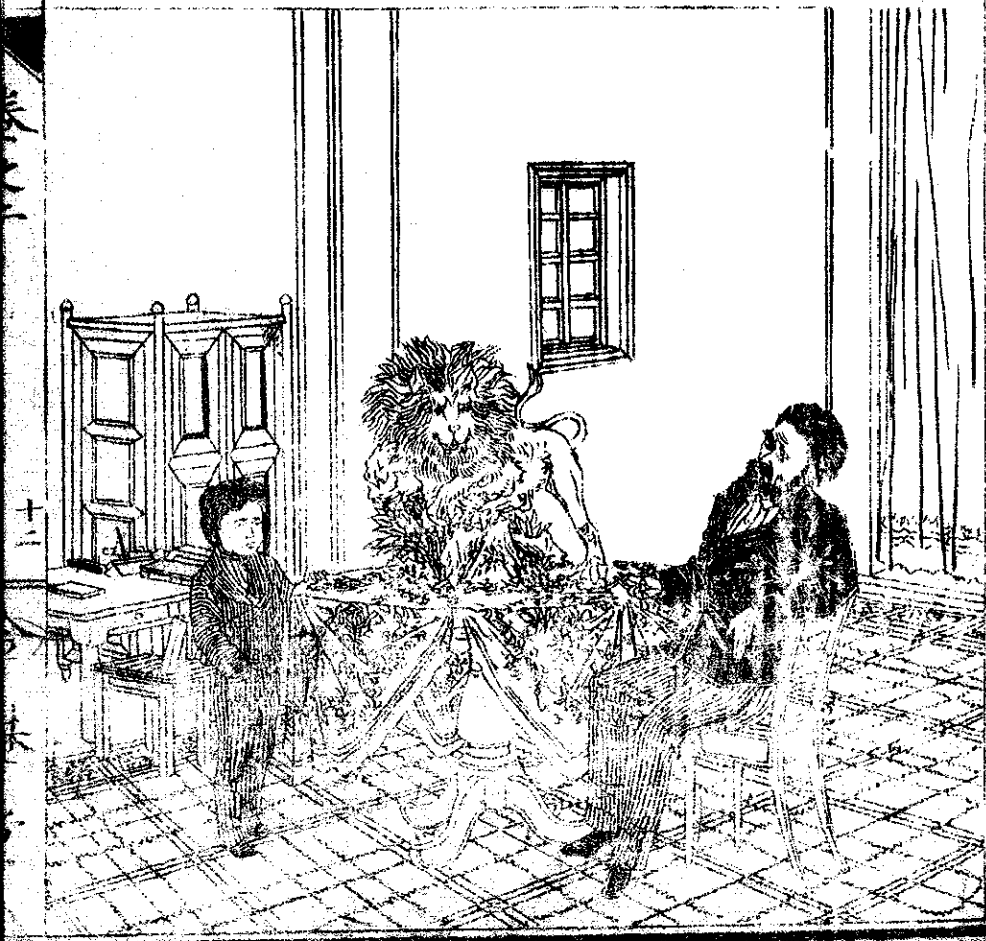
第三

ケノバハイタリ、國ノ人ナリ、三歳ニシテ父ヲウシノヒ、母ニツカヘテ孝行ナリ、サレドモ家素ヨリ貧ナレバ、母他家ニ再醮シ、ケノバヲ其ノ祖父某ニ託セリ、祖父ケノバニ己ノ業ヲ續ゲシメント、乃彫刻及ビ模畫ヲ學ハシムルケ

ノバ、天性英敏ニシテ、一ヲ聽キテ十ヲ知リ、速ニ其ノ業ニ進歩セリ、一日、祖父アル富家ニマ子カレ、机上ノ玩物ニ供フル、珍奇ノ獸形ヲ作ランコトヲモトメラレ、家ニカヘリテ、日夜思慮ヲコラセドモ、妙按ナシ、因リテケノバヲ招キ、之ヲハカリケレバ、ケノバ曰ハク、我嘗夥多ノ乾酪ヲ蓄ヘリ、ユレヲ用ヒテ、獅

子ヲ作ラバ、必其器ニ適フベシト、乃五
 夫ヲ積ミテ、竟獅子憤叫ノ狀ヲ作レリ、
 祖父コレヲ視ルニ、目ノ瞋ルトコロ、耳
 ノ歌ツトコロ、口ノ開クトコロ、牙ノ尖
 ルトコロ、四支ノ勁キトコロ、蹄ノ銳キ
 トコロ、コトゴトク、其ノ妙ヲ盡リザレ
 ハナシ、祖父大ニ悦ビ、即之ヲ富家一贈
 リケレバ、富家ソノ精巧ニ感ジ、至重ノ

珍物トナ
 セリ、是ヨ
 リ「ゲノバ」
 精刻ノ名、
 四境ニ聞
 エイタリ
 「第一ノ
 石工師ト



稱へうれたり、時二年僅二十三ナリ
トゾ

第四

長吉ハ陸奥の國柴田郡足立村の人な
る父を長五郎といふ田地三石をかり
領せきども家いと貧るる事きハ長吉
四歳のときより人の家よりあわれ
しハ母の病ひによりて家より歸きりこ

き寛延二年の秋かり幾ほとくあくる
る父より疝を患ひ腰痛みて起つこと
たふん叶まば父母といふ斯く病ひの
床より卧し事きハ殆饑餓におとづるや
きに長吉ハ歳なりしが山谷の險阻を
えいとまば日々わすれりて松の樹を
伐り又ち枯き枝などを拾ひこれをも
ひて村田街に鬻ぎそのあさひより米

麥、雪花菜
 の類を沽
 ひ、以二親
 乃饑乏を
 免とひず
 里、かゝせ
 一うちふ
 母は病を



以え一うど故ありて其の家をさきり
 この年も暮れて父の病ひを以て劇
 く貧乏なりけり甚く事せば年を迎へん
 こととおぼつゝあゝと父乃心をいた
 満ちむるを見て我山に行き正月の門
 またつる松を伐りて售らば年をこほ
 るとわゝとやまからんといひてこれ
 を慰めたり身よまとふ衣裳衾褥さへ

く乏きれば父の寒さを防がんため竈
の傍は藁をくきてそれうへう囲ませ
夜とまゝ晝とまゝ柴薪を焚きて火は
絶えぬやうふかき春を迎へて長吉
九歳はあきばいよく日ごとに深山幽
谷ふれあひて獨活や薇あや銭とて
市におんむきこれを售り長吉一日
川ふり糧を洗ひ居るを菅生村龍雲

寺の僧あやうくこきをとつて長吉
も有乃す銭をかきあつて僧ふく
夢の孝心を感じ長吉を攜へて寺よか
つ里米五升をあつたり長吉大ふ
ろこびて法ぶさよ之を父ふ法をその
報いとして獨活と薇とをおくりされ
僧も二升の米は豆豉をそへてほち長
吉はおくりし長吉十歳はあきり長

延びたまは、よく勉強して人、雇
ふ松板などを三四枚背負ひて、村
田街より一日二回づつ往還せり。夏ハ紅
花を製する家より、それすべし寸暇
を空くせば、父を養ふに盡力せり。其の
篤孝著るまじき。長吉が售るもの、人々
其價をたうく買ひ、長吉が買ふもの、人々
く其價をひきとせり。長吉介抱ふこ

たり。あつれば、父の病ひも平愈せり。郷
黨みなこれに感づて、長五郎が領する
田の租税を、郷人心を安んぜしこれに
償ひ、それ外にあふるを、長吉に力
をそへ、之を賑恤するもの多かりけり
が、其の事國主よきこと。寶曆二年長吉
小金若干をた回ひ、その孝義を賞せら
る。是より時、長吉十一歳あり。

第六

孫叔敖嬰兒タリシトキ憂ヒテ食セザル事アリ、其ノ母其ノ故ヲ問ヒケルニ泣キテ曰ハク、今日我兩頭ノ蛇ヲ見タリ、オソラクハ死ヲサルコト遠カラジ、母ノ曰ハク、今蛇イヅクニカアル、曰ハク、我聞ク、兩頭ノ蛇ヲ見ルモノハ死スト、我他人ノマタ見シユトヲ恐レテス、デニ殺シテ之ヲ埋メリ、母ノ曰ハク、憂フルコトナカレ、汝死セジ、我聞ク、陰徳アルモノハ、天報ズルニ福ヲ以スト、長ズルニ及ビテ、令尹トナリ、老イテ後死セリトゾ、

第六

凡事ヲ成シ、技ヲ修メ、身ヲ立テ、名ヲ成サントスルモノハ、艱難ニ耐ヘ、辛苦ヲ

忍ブノ剛氣ナクンバアラズ、畫工マル
 チン始メテ大畫圖ヲ筆セシトキ、餓死
 セントル事數回ナリシガ、少モ屈セ
 ズ、必ソノ成功ヲ期シ、勉勵自若タリ、嘗
 數日食セズ、飢渴ハナハダシケレバ、囊
 中ヲサグルニ一銀錢アリ、コレヲ以、麵
 包ヲ買フニ、店主タチマチソノ麵包ヲ
 奪ヒ、錢ヲ擲キ還セリ、コノ銀錢ハ其ノ

光リ燦然
 タルガ故
 ニ蓄ヘオ
 キタリシ
 モノニテ、
 ソノ贗錢
 ナリトハ
 毫モ知ラ



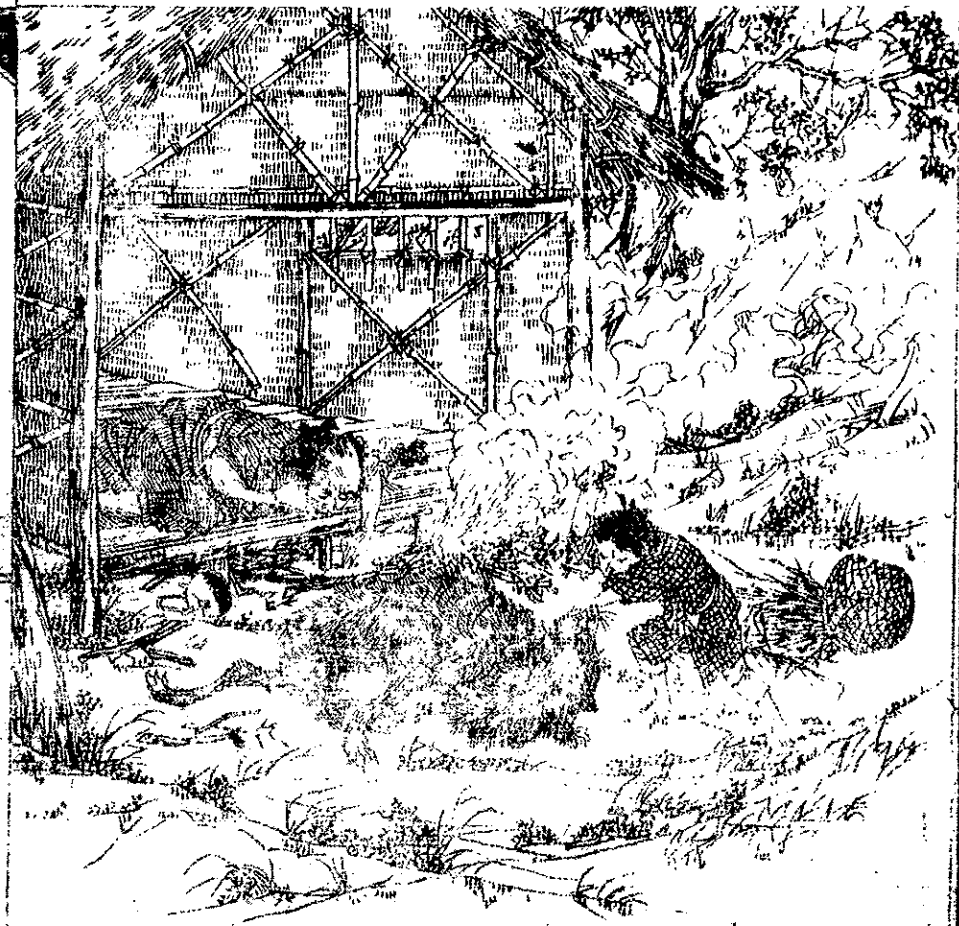
ザリシナリ、マルチン、悵然トシテ寓舎ニ歸リ、櫃ヲカタムケ、麵屑ヲ集メ、僅ニ其ノ喉嚨ヲ濕セリ、其ノ後數日ヲ經テ、大畫圖成就シ、コレヨリ名聲ヲ世間ニ傳播セリ。

第七

龜松ハ父を總右衛門といふ信濃の國佐久郡内山村の農民ナリ、内山村を上野と信濃の間なる破風山の麓ニテ、猪鹿のたぐひいやとぼく田畠を蹂躪し、五穀を妨害するゆゑ、村民處々小番小屋を設テ、田畠をほとく、總右衛門父子も逢月といふところ、小屋を構へやどり、天明八年九月二十五日の夕つゝ、龜松を外出で、草を刈り、總右衛門へひとりと小屋ふり、火焚焚

ま、臥し居たりしが、獐狼突然とて来
 り、總右衛門が足を齧みけるふを、總右
 衛門大に驚き、これをふくもあせしに、
 狼より唇より腮をうちて、囓つきた。
 且、總右衛門、いゝんといゝが、よく狼の
 耳を掴みて、號叫せし、龜松この聲に驚
 き、走り來り、直に鎌を揮ひ、狼の口を
 突き入るゝが、鎌の柄折れより、由りて

満ち父の
 鎌をとる
 て、狼の口
 を突き入
 る、と、鎌を
 倒し、あ
 げ、狼を
 怒りて、



奮ひ起きんとせしを、側なる石をとて、
狼の口なる鎌の柄、力を極めて、打ち
こみ、爺をば、狼は齒牙貳三折れたり、龜
松力のあらんかぎり、大指を以、狼の兩
眼を抉り出し、遂に狼を斃し、父が數
多の嚙傷を被るるを、扶きて家へ歸り、
種々治療を加へ、爺をば、數十日を経て、
平愈なりぬ。龜松時より十一歳あり、龜松
賦性孱弱なり、父の危急を見て、之
を扶けんと、身命を顧む、猛獸と格闘し、
之を斃せしむ。それ親を愛するの至誠
ふ出でしものなりとて、代官大貫次右
衛門、之を幕府へ聞えあげ、かむこ
の年の十一月、銀子若干を賜ひて、褒賞
せられたり。

第八

曾參ハ、孔子ノ弟子ナリ、父曾皙嘗之ヲ
撻チシカバ、曾參地ニ仆レ、息絶エシガ、
須臾ニシテ甦リ、直ニ房ニ往キ、琴ヲ鼓
キテ歌ヒタリ、蓋父ノ之ヲ聞キ、其ノ體
ノ康キコトヲ知リテ、心ヲ安ンゼン事
ヲ欲シテナリ、孔子之ヲ聞キ、曾參ヲ叱
シテ曰ハク、昔舜ノ父ニ事フルヤ、小杖
ヲ以テ撻ツトキハ、伏シテ罪ヲ待チ、大杖
ヲ以テスルトキハ、必速ニ逃グ、故ニ瞽瞍
父タラザルノ罪ヲ犯サズ、今汝ノ父ニ
事フル身ヲ委テ暴怒ニ當リ、仆レテ
避ケス、若之ニ依リテ命ヲ失ハ、父ヲ
不慈ノ罪ニ陷レン、不孝之ヨリ大ナル
ハナシト、

第九

アメリカ合衆國ノ大統領、ジョージ・ワ

シントンハ同國のルジニヤ豪家の子
 ナリ、父一株の花樹ヲ庭中ニ植エ、朝夕
 ノ愛觀ニ供ヘリ、時ニワシントンハ九
 歳、群兒ト戰陣ノ狀ヲナシテ戲レ、斧ヲ
 以縦横ニ之ヲ斬伐シ、紅緑狼藉タリ、父
 之ヲ見テ大ニ怒リ、奴婢ヲ鞠問スルニ、
 僉知ラズト云フ、父益怒リテ、其ノ怠慢
 ヲ責メリ、時ニワシントン謂ヘラク、我

父ノ愛樹
 ト知ラズ
 シテ、之ヲ
 伐レリト
 雖、其ノ罪
 實ニ深シ、
 今默シテ
 言ハザレ



バ、是父ヲ欺クナリト、乃、膝行頓首シテ
謝シテ曰ハク、樹ヲ伐ルモノハ兎ナリ、
願ハクハ、大父兎ガ不孝ヲ罰シ、奴婢ノ
怠慢ヲ咎ムルコト勿レ、父、膝ヲ拍チテ、
喜ビテ曰ハク、世間壯者ト雖、其ノ非ヲ
掩ヒテ、僥倖ヲ求ム、今、汝乳臭ノ兒ヲ以、
自、其ノ罪ヲ鳴ラシ、奴婢ノ冤ヲ解カン
トス、其ノ正直ナル、眞ニ吾ガ子ト稱ス
可シ、汝ノ一言、烏ゾ一樹々及ブ所ナラ
ンヤ、

第十

傳藏も、父、貞右衛門といふ、安藝の國
高田郡、桂村の農民なり、貞右衛門田二
十石を領し、二男一女あり、傳藏ハ其、
第二子なり、賦性至孝ふして、人と争ひ
しことある、六歳の時より、長者を敬ひ

神佛を尊く、朝夕佛壇を掃除し、香を焼
き、花を供へ、神位を拜し、家内の人々
も拜禮せしめ、これらを待ちて、戸帳
を閉づるを、日々己の課業とせし傳藏
十歳のころ、其の母虚勞の病ひふか
き、荏苒として床に臥し、遂に危篤を向
ひ、死に妊娠ありしをば、快復するごと
く覺束ふ。松庵といふ醫師の父の詔

るに、聞きて、大に之を憂ひ、日夜心を焦
し、思ひを苦め、飲食を、一々禁忌を醫師
に質問して、自調へ、膳を供し、藥を煎し、
其の食量、常に減むるをば、痛く憂ひ、常
に多くをば、悦ぶること限りなく、肩
を撫で、脚を摩り、夜も勞れて、其の儘眠
ることあり、一夜ある人、其のありさま
を憐れ、衣をもて、覆ひしに、驚きて、目を

覺し、夜も
 まどろ、介
 抱せり、傳
 藏一日、松
 庵より向ひ
 昨日賜も
 あり、薬も
 こまきやう



の處方と替り、やと問ふ、果して、持
 り門生乃、他の家へ遣ふに、べき薬を、誤
 りて與へられ、松庵大に之を愧ぢ、
 弟子の鹵莽を陳謝し、小兒より、持の
 心を用ふるの、深切あるを、ふらく感せ
 る、傳藏常は、小兒の群り集ひて、喧囂な
 ば、處より遊ぶことも、好まざりども、母
 のいさぐ病まざるまへ、ふち、群兒と戯

れ——ことゝあり——が、母の病ひふか、
まゝとて、嘗あそび——こととて、一日、外
國人、此の村を過き——らば、闔村の男
女、先を争ひて、之を見、た傳藏ふも見
えや、勸むきとて、遂出でざりけり、又隣
家ふて、伊勢神樂の舞ひを奏せとて、村
中、兒童等、群り集ひて、歡笑の聲、喧々
きとて、母の傍に侍りて、戸隙をも窺ひ

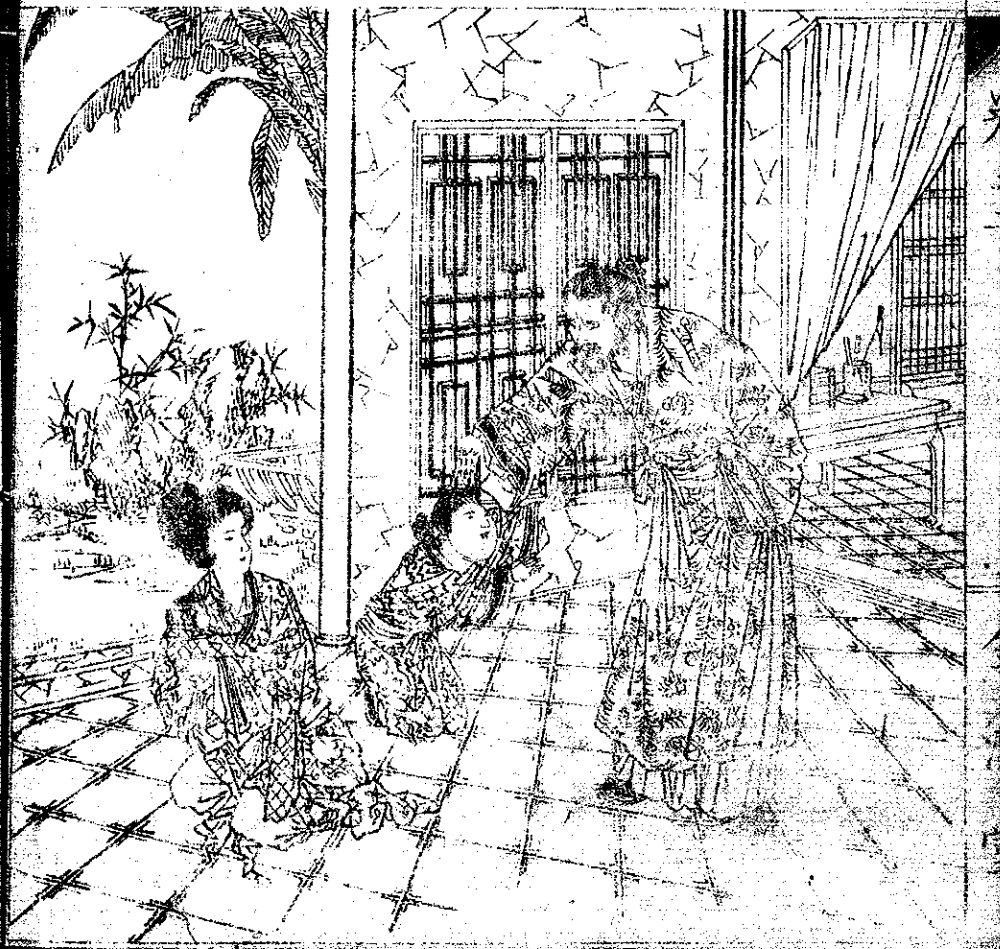
ざり——とて、ある日、夕つら——煙草を刻
む刀ふて、足に傷はち、血の頻ふ出づる
を以て、悲みけきぞ、痛きほ——きやと、人
の問ひ——血出で——止まざれば、今宵
母を看護せしこと、能はざるを憂ひて、
なと、創の痛みなど、少く厭ふべし、
ひも了らざるふ、母の呼びあれば、直ふ
その前——い——、抱せ心を痛めんこと

を恐きて、創傷を掩ひかゝり、平生の如
くよゑのがをりせりとぞ、母やがて、産
小臨きて平かゝ分婉し、小兒い死せし
が、其の病ひと漸くよ愈えとぞ、かゝる
この事、世よ著せられ、國主も銀子若
干を賜ふとぞ、時に天明五年の三月
ふて、傳藏十一歳なり、

第一

支那春秋ノ時、孔子ノ弟子ニ関損ト云
フ人有リ、其ノ母死シテ、父後妻ヲ娶リ、
二人ノ子ヲ生メリ、損孝養闕クコトナ
キニ、繼母甚之ヲ疾ミテ、嚴冬ノ候、其ノ
子ノ衣服ニハ、綿絮ヲハレ、損ノ衣ニハ、
蘆花絮ヲ用ヒタリ、一日、父、車ニ乘リ、損
ヲ馬ヲ御セシメシニ、寒風殊ニ甚ク、
損體寒エテ、靴ヲ失セリ、父之ヲ責ムレ

トモ損敢
自理セズ
父察シテ
之ヲ知リ
後妻ヲ去
ントス損
諫メテ曰
ハク母在



セバ一寒シ母去ラバ三子凍エント
父之ヲ好シテ止ム母モ亦悔イ改メ是
ヨリ三子ヲ待スル事均クシテ遂慈母
トナレリ

第十二

ステペンソンハ英國ノ人ナリ家貧ニ
シテ父ト共ニ石炭ヲ掘リケルガ擢デ
ラレテ鑛山寮ノ官吏トナルニ及ビ公

勢ノ餘暇、機械學ヲ勉メ、萬世不朽ノ良器ヲ製作シ、庶民ノ便用ニ供セント、多年ノ工夫精志ヲ凝ラシ、西曆一千八百一十二年、吾カ光格天皇文化九年ニ至リテ、遂火輪車ヲ創意シ、後又鐵道ヲ發明シ、西曆一千八百二十五年、吾カ仁孝天皇文政八年ニ至リテ、英國ストックトンヨリ、ダハリントンノ間、凡三四里ノ

道程ニ、鐵道ヲ通シテ、始メテ火輪車ヲ試ミシニ、其ノ迅速ナルコト言フ可カラズ、是ヨリ西洋諸國競ヒテ此ノ法ヲ用フルニ至レリ、

第十三

赤貧ノ樵夫アリ、一日水ヲ河畔ニ伐リ、過チテ斧ヲ水中ニ落シ、歎キ哀ムヲ甚シ、其ノ時水神忽然現出シ、直ニ水中ニ

沈ミ、金斧ヲ持チ出デ、汝ノ斧ハ是ナ
リヤト問フ、樵夫是ハ僕ノ斧ニ非ズト
答フ、神又水中ニ入り、銀斧ヲ持チ出デ
、是必汝ノ斧ナラント云ヘリ、樵夫答
フル初メノ如シ、神マタ水中ニ入り、鑊
斧ヲ持チ出デ、是ナリヤト問フ、樵夫
大ニ喜ビ、是則僕ノ斧ナリト答フ、神其
ノ正直ヲ賞シ、鑊斧ニ金銀ノ斧ヲ併ハ

セテ、之ヲ賜フ、樵夫アリ、之ヲ聞キ、同處
ニ行キ、樹ヲ伐リテ、斧ヲ水中ニ投ジ、以
水神ヲ祈ル、水神忽然現出シテ、忽水中
ニ入り、須臾ニメ、金斧ヲ持チ出デ、汝ノ
斧ハ是ナリヤト問フ、樵夫アハタバシ
ク手ヲ出シ、是則僕ノ斧ナリト云フ、神
大ニ怒リ、其ノ邪曲ヲ痛ク戒メ、金斧ヲ
授ケガルノミナラズ、前ニ落セシ斧ヲ

モ返サザリシトゾ

修身説約卷の二

明治十年九月廿日版權免許 同十二年十一月校訂
同十四年三月廿四日再版御届 同十四年九月五日譲受御届
同十五年三月十五日三版御届

群馬縣御用掛

編纂人

木戸

麟

東京府士族

出版人

原 亮三郎

東京市橋區本町三丁目七番地